

現代敬語の一傾向

—— いわゆる行過ぎについて ——

辻村敏樹

戦後の敬語の混乱には甚だしいものと云われます。それは既成道徳觀念の崩壊に伴う意識的或いは無意識的な敬語の輕視や無視の傾向と、戦前と相も変らぬ虚飾、阿諛、封建性等による過剰の面とがもつれあつて一つの渦をなして流れている為、いやが上にも混乱に混乱を極めていくといった状態と云えましょう。今はその中から、後者すなわち、過剰の面、世間に云われる行過ぎの問題をとりあげ、その実態原因等について考察してみたいと思います。

ところがここで問題になるのは一体過剰とか行過ぎとかいう場合の基準はどこにあるのかということです。實際、この問題は非常にむずかしく、その人その人の主観によつてもかなり異なりますし、また社会層による相違とか地方差とかいうようなこともあり、更には時の経過による敬意の変転なども考えますと、この辺なら適当だがこれ以上は行過ぎだというようなことは容易に云えることではないと思います。だから、ある一つの云い方をとりあげて、これが最もよからうと判断したところで、それはその人だけに通用するもので、他の人はそれを丁寧すぎるとするかも知れ

ないし、或いは逆にゾンザイだとも思うかも知れないということもできるわけです。

しかし、敬語というものが、相手あつてはじめて成立つ性質のものであれば、右のようなことはむしろ当然とも云えるわけで、その点かなづかいのように相手の意図に拘らず自分の思うところを實行できるものとは性質が異なるわけです。

しかし、また、物には程度がありますから、多くの人が馬鹿丁寧とか行過ぎと感じるものもあるはずですし、反対にゾンザイだと思うものもあると思います。

そこで以下には、現に人によつて行過ぎとして指摘されたもの、或いは極端な例で、恐らく多くの人が非と認めるに違いないと想像できるような例について考察して行きたいと思ひます。

では一体、敬語が「行過ぎ」といわれるのはどんな場合でしゅうか。私はこれを次の三つの場合にわけて考えてみたいと思ひます。

第一、同じ敬語でも、それを普通以下の対象に向けて用いる場

合

第二、過当使用の場合

第三、誇張的な表現

第一の例は、たとえば、「先生」なら「先生」という言葉を友人間で用いたり、或いは教師から逆に教え子に向って用いたりするような例で、私自身現にそういう手紙を受けた経験もあります。これは社会慣習からすれば当然上向関係に用いる言葉を、対等または下向の関係に用いたという点で異例ということができません。そして、その異例ということは、とりもなおさず行過ぎの使用法を意味するものと考えて差支えないと思われます。

こういう例には更に、動物に餌をやるのに「あげる」というような場合もはいるのでしょうか。一例をあげれば、「言語生活」(五号)耳欄の言説にも諸謹的な云いながら明らかに「あげる」を否定する口吻がうかがわれますし、その他同様な意見の人は多いようです。しかし、この「あげる」は私自身の気持としては、もう上向語というよりは言葉遣を丁寧にするだけの云い方、つまり「申す」などの現代的用法と同様になっていると判断してよいのではないかと思います。ただ「申す」の方は、話相手や第三者から話手への行動についても云えるのに対し、「あげる」はそれができないという点に相違が見られるようです。(「申す」の現代的用法については「国語学」第二十一輯の「敬語の誤りについて」を御参照下さい。)しかし、とにかくこの「あげる」の使用法をも行過ぎと見る人もあるという事実だけは述べておかなければならないと思います。その他「ごさいます」を相手かまわず

使用する時などには行過ぎ的用法となることはいうまでもありません。

ところが、こういう現象は何も現代に限ったことではなく、敬語の存する限りいつの時代にもあるものと思われれます。(そして、そんな理由からも敬語の価値は減少して行くのでしょうか。)例えば、次の例などいずれも江戸時代のもですが、一様に右と同様な例が当時にも存したことを裏書して居ます。

(1) (上略) 今は武家に至るまでお前と呼ぶ、御前と稱するが如し。譬の諺に云く、お前敬薄、同輩に向ってお前と云ふ事、

詔者なる事を云ふ。〔司馬江漢・春波樓筆記(文化八〇一八一一)年成〕日本隨筆大成・第一期・卷一・四四七頁

(2) (上略) 又下輩へ貴様といへるなど、中々敬に過て、誤がましけれど、耳なれたる故、さのみ尊卑の亂れたる様におもは

ず。〔田宮仲宣・東臚子(享和三〇一八〇三)年刊〕日本隨筆大成・第一期・卷十・一六〇頁

(3) 御盃をいたゞき侍らんといふべきを。頂戴仕りませうなどいふは。そのむかふ人によるべし。あなたが貴人高家ならずは似つかはしからぬことば(18ウ)にや。又ぎよはいと申も。平人の上には然るべからず。あなたが貴人ならずはいふべからずとかや。かやうのこと葉に氣をつけずして。只ぎよはいぞ。頂戴ぞとさへいへば。よきことぞと斗心得得。ちと時めく平人にむかひても。頂戴ぞぎよはいぞといふ人は。をのれはからさる輕薄者に成侍ることなり。いともはつかしきこと。又その身に(19オ)應ぜずして。こばしがほもにく

しやと云り。(安原貞室・かたこと(慶安三「一六五〇」年刊)国語学大系・第十九卷・一〇六)

(4)「申し上ぐる」は話す對手の人を甚だしく尊敬するものであつて、召使が主人に對して使い身分の低い者がはるかに高い人に對して使うのであるが、近頃はその用法が崩れてゆき、主として宮廷や手紙の上で、あまり尊敬されない人に向つても、甚だしく丁寧に言うがために使われている。「ロドリゲス大文典。一六六丁オ。日本の言葉・第七号。土井忠生氏の

訳による。以下にあげる大文典の例はいずれも同氏訳」

(1)の例は、「お前」という言葉が当時まだ一般には上向關係に用いられる言葉だったのに同輩にも用いられることがあつたことを示し、(2)の例は、「貴様」が対等語の位置を保持しながら一方下向關係にも用いられるに至つた状態を示して居ます。これは前例「先生」の場合に近いものがあると云えましょう。「貴様」については「金田一博士古語記念 言語民俗論叢」に收めた「『貴様』の変遷」と題する論文を御参照下さい。また、(3)(4)はいずれも關係敬語などとも呼ばれる類のもので、(3)は相手から受ける自己の動作、(4)は相手へ向つて自分の云うことと、方向は丁度逆になりますが、ともに相手と直接関連のある自己の言動を云うという点では共通します。そして、自己をできるだけ下の位置におくことによつて高い敬意をあらわそうとしたところに双方の表現上の共通性があると見られます。そして、この方は前記の「あげる」の場合と比較することができると思ひます。

ところで、これ等四例はいずれも社会の言語慣習を破つた敬意

表現であることについての発言ですが、このように一つの言葉が社会通念からいつて上向語(或いは対等語)というように固定している場合には、それを対等、或いは下向の方向に用いるということは普通以上の敬意を示すのに著しく効果的となり、従つて、それを用いる人にしてみれば所期の目的を達し得ることになるのでしようが、一方傍から見れば行過ぎとか阿諛的表現とかいふことにもなるのだと思ひます。

このことは現代と違つて敬意の度合による代名詞の順序などのはつきり規定されていた江戸時代においては一層顯著であつたと考えられます。しかも、その通念を破つた使い方も段々広く、また屢々用いられるに至つては、それが常態ということになり、ついには敬語としての価値の下落を招き、いわゆる敬意漸減の法則が実現される結果を生むに至つたものと考えられます。

たとえば前記の論文「『貴様』の変遷」でもあげた例ですが明和三(一七六六)年の「日用贈答書札并感集」(上原茂雅著)という本をみますと、二人称代名詞の例が列挙されていて、そこでは「御手前様」という言葉には「上」、「貴様」には「等」という説明がついていて、前者は高い敬語、後者は対等語というようになっていますが、下つて寛政十二(一八〇〇)年の「通達仕用書状大全」(戸田栄治著)になりますと、「御手前様」には「中」、「貴様」には「下」という格づけがしてあります。これは兩代名詞が、その間にそれぞれ一段ずつ格下がりしたことを示して居り、前に述べた事情を端的に示すものと云えます。そして、この様な格下げの推進役に阿諛的使用などが役立ったことは容易に想像が

つきます。

もっとも、このような故意による下目への使用でも、それが敬意に基くのではない場合には、たとえば、「フン。あなた様は結構な御身分で御座いますよ。」というような揶揄の表現ともなりますから、私が申しますのは、敬語を純粹に敬意を示す言葉として用いた場合に限ります。

以上は、結論的に云つて敬語の方向軸を下に向けた場合におこつた行過ぎとも云えましよう。

次に、第二の過当使用の例ですが、これは更に(1)濫用(2)重複使用の二つに分けてみたいと思います。もっとも後者は前者の中にはいると云えば云えますが、それは二重三重の敬語形をとつたものに限つて云うこととし、前者の例としては、(4)同種異種を問わず敬語をむやみに繰返し用いる場合、(4)更にその勢余つて普通には敬語形にしないような言葉まで敬語にするような場合の二つを考へることにします。

そこで、まず濫用の例ですが、この典型的なものとしては、やはり多くの人からも指摘されている敬語接頭辞「御」「お」「ご」「み」「おん」等全部を含む。)をあげないわけには行かないと思います。

しかし、現代の用例は毎日のように誰の耳目にもはいるところですから一応さしおき、その源流をさぐつて暫らく目を江戸期に移してみたいと思います。ところが、ここでもすでに今日同様の状態であつたことは次のような例からも知られます。

ハイ／＼ありがたうござります。別して當年は子エおまへさん。いつもと申す内にもとりわけお寒さが強うございます子エおまへさん。夫でもお寒さのおあたりもございませんで何よりおうれしう存ます。宿でも一寸お見舞に参りたがつてとございまして、是も又おまへさん子。お屋しきさまの御用が追く重りまして。イエサまこと／＼におまへさん子。三度／＼のお飯さへちろく／＼落着てはくださいません程でございます子。 (浮世床・二篇巻之下)

さやうさ子エ。おしつけ御奉公にお上り遊ばすと。夫こそ最う大和詞でお人柄におなり遊ばすだ。其時には私の旦那さまのやうに片はづしか。勝山にお髪をおあげさせ遊ばして。さぞお美しからう。お規式の時にはお下髪で。お眉を遊して。地黒や地白や時／＼のお櫛を召て(浮世風呂・三編巻之下)

前者は商家の姑、後者は屋敷勤めの下女の言葉ですが、このような例がいつも女に多いことは否めず、諸家のあげられるものも大方こういったものです。(真下三郎著「婦人語の研究」、湯沢幸吉郎著「江戸言葉の研究」等参照。)

ところで、これは江戸も化政期というかなり下つた頃のものですが、それよりずっと溯つた頃にも、すでにそういう傾きのあつたことは例の醒睡笑(元和九(一六二二)年成)巻之二に、

始て奉公する者あり、お殿様おわかう様おかみ様と、何にもおをつくる。主人かれにむかひ、むざとおの字をつけまひ、聞にくしとあり。其後膳をすへ、跪るけるが、主の鬚に飯粒がつく、右の男殿様のとかひにだいつぶがついたと申ける。(日本

とあるような例からも知られます。これについて、石坂正藏氏は「異なる下級の言語團體の者が、より上級の階級と交渉する生活に入る時、その言語慣習に慣従しようとの一心の努力が、反って反對の効果をもたらす過度の濫用となり、その失度を戒められた反省の結果は、更に度を外した節約の爲に益々惡化する、現時でさへも有り勝な事件を、滑稽的に見たのである。」（敬語史論考・五二セ）と述べられ、また、真下三郎氏は前掲の書物の中で、「これだけでも『お』の字を無闇に附ける愚を避けたことが察せられる。」（四〇セ）と説明して居られますが、とにかくこの様な笑話が成立つということは、やはり、少くとも武家社会においては身分の低い者から高い者への諛的な「御」の濫用が極めて多かったということを裏書して居ると云えましょう。とすればまた前記のような武家屋敷に關係のある女の言葉に、「御」が多いのなどはむしろ当然のこととなって来るのではないでしょうか。

ところで、このようにして「御」の濫用は随分古くからあったことがわかりますが、このことは、当然その慣用語以外への進出、つまり、普通には付けないような言葉にまで使用する現象を想像させます。

これは私が前項に何の場合としてあげたものですが、江戸時代すでにそういう事実のあったことは次の二例からも云えましよう。すなわち、前記ロドリゲスの大文典に、相手へ贈る物をあらわす言葉に接頭辞「御」をつけることについての説明があつて、

「（上略）かかる名詞に添えるのは、話し對手とか贈り先の人とかに對して一層高い尊崇畏敬の念を示す爲か、それらの人々の使用に供せられるのが上述の物であることを示す爲かである。」とある後に、「御太刀」「御馬」「御弓」等の例をあげてありますが、更にその後、「それに就いてまた注意しなければならぬのは、『主人』『貴人』等へ差上げる品物であつても、例えば『鯛』『鰯』『鮓』『鮓』『鮓』『鮓』『鮓』『鮓』『鮓』等の類であれば、『おん』を使うことができないということである。」と記して居ますから、（以上日本の言葉・第五号）「御肴」という表現は當時は一般に許されなかったものと考えられます。ところが、それから約百七十年を下った林笠翁の仙臺閑語第三（明和元（一七六四）年）には、

（上略）然ルヲ東都ノ人ハ、酒肴ノ外ハ、魚肉ナラデハさかなと不レ云。人ニ贈ルニ御肴ト稱ス。公私皆然リ。魚バカリヲさかなト云サヘ有ニ、御字ヲ加フ。我贈物モ贈レバ、人ノ物ニナル故ナルベシ。諺ニ云フ。取越問答也。今時ノ御字此類多シ。

（日本隨筆大成・第一期・卷一・三一九セ）

と記しています。これは「肴」と題する項目の一節で、「さかな」は本来何も「魚」に限ったものでないのに、江戸では世間一般にそうなつてしまつたと云つて言葉の変遷を論じているところですが、同時にその「肴」という言葉に「御」をつけることも問題にしているわけです。しかし、「今時ノ御字此類多シ。」として「魚」の場合もそれと同じに見た結論は、明らかにロドリゲスの立場とは異なります。ただ、そこにはかなり長い時の経過がありま

すから、勿論これを同列に論ずることはできないと思います。しかし、その間「御着」の使いそめの頃、やはりその言葉は行過ぎ或いは誤りと見なされたに相違ないということははっきり云えましょう。それは明らかに慣用を破るものですから。

ところで、再び現代に戻ってこういうような非慣用的な「御」はないかと言いますと、それは随分多いようです。

しかし、一つ一つの言葉が果して行過ぎかどうかということになりますと、非常にむずかしい問題になりますし、第一それは規範的な立場になりますので、私は私なりにおやつと感じた例、及び明らかに行過ぎだとして指摘されている例（これは多く「言語生活」耳欄によりました。）について考察したいと思います。

その第一は、名詞に冠する場合ですが、これはいわゆる丁寧語に属するものに多いようです。私自身耳にしたものには「おトイレ」、「お町」、「お村」等があります。この中「おトイレ」はすでに一昨年朝日新聞に連載された「ことば談義」の中などでも指摘されて居ますが、私はそれと同じ頃に大学の女子学生の口からこの語の発せられるのを聞いて居ります。その他、料理屋の女中の言葉などではもっと古くから使われているとも聞きますが、これらはすべてを美化しようという女性心理の言葉の上に現れた典型的な例と云えるのではないのでしょうか。（お手洗・御不浄・お便所等参照）

ところでこの「おトイレ」という云い方は例の室町時代の「太上藤御名之事」に見える「おなま」（なます）、「おはま」（はまぐり）、「おかつ」（かつお）等と形態的には同じことになりま

すが、「おトイレット」というところを下略したのではなく、「トイレ」という省略語が先にできていてその上に「お」をつけたわけですから成立過程は違います。しかし、女性語としての「お」という意味では共通性があると思います。これと全く同じ例に、「おヒス」（ヒステリー）というのがあることは言語生活三十五号「耳欄」の指摘するところです。（なお同誌には他に「おナマ」（生息）「おザブ」（座蒲団）の例を、前者はラジオドラマ、後者は料理屋での用例にあげてありますが、この方は完全に女房言葉の形態を踏襲して居るものと云えましょう。）

次に「お町」と「お村」ですが、これは明らかに「お國」や「お里」が慣用的であるのに対します。使用者は中年の婦人で「お」のつけられる言葉には殆どそれをつけているといった感じでしたが、これに関して思ったことは、女性は一体どのような言葉に「御」をつけるのかということを詮索するより、どういう言葉にはつけない（或いはつけられない）のか、ということを明らかにして行く必要があるのではないかということでした。しかし、今これについての結論は持ちあわせませんので、以下にも実際に「御」のついた言葉に関して考察をすすめることに致します。

以上は名詞についた例の中、特に耳立ったものをあげましたが、次には動詞に冠して、「お……になる」となった場合と、「お……する」という形式をとったものについて考えてみます。

前者が、今日の動詞語法における尊敬表現の様式として典型的なものであることは云うまでもなく、この形は実に多く現れます。しかし、「言語生活」第七号耳欄にのった女アナウンサーの「い

ろいろな國をおやつつけになったんですね。どんな國をおやつつけになったんですか。」という卓球選手に対する質問のような例は私にもやはり奇異に感じられます。これは「やつつける」という言葉が極めて俗語的なものである為、そこに「お……になる」という、いつてみれば上品な標準型の敬語形式をもつて来たところに矛盾があり、おかしさが感じられるのだと思います。それは試みに「おぶんなくりになる」「おけつとばしになる」等の云い方をしてみればよくわかります。従つて、これは行過ぎという感じよりはチグハグといった印象を受けますが、こんな言葉にすら「お……になる」形式をあてはめるところに現代敬語の一つの姿が象徴されていると思います。

それから、「お……する」形式ですが、これも「言語生活」から材料を借りますと、

陛下におとりしては大変それが楽しいんではないか……N・H
・K・座談会、某名士。(二十六号)

○○キャラメルは文化人におうけしている……コマーション・メッセージ。(三十五号)

というようなのがあります。

これらはいずれも「とつて」、「うけて」ではゾンザイだという氣持から云いかえたのだと思います。ところが「お……する」形式は、本来はいわゆる謙讓語法に属して、話手の動作が聞手や第三者に及ぶ場合に用いられるものですが、ここではどうしてもそういうふうには考えられません。では、これをどう解釈したらよいかというのに、勿論尊敬語法と見なすわけにも行きません

し、私はやはり一種の丁寧語法と見るよりしかたがないと思います。この場合「わたし昨日学校お休みしちゃった」(女子高校生省線内で)というような云い方が随分普及して、(「言語生活」には「陛下におとりして」の例と共に、「会社におつとめしています」。(《K・Rのクイズの出場者》が実例としてあげてあります。))他へしかけるでもない自己の動作にしば／＼「お……する」が用いられていることも参考になると思います。それはもう謙讓表現というより丁寧表現に属するはずのものだからです。しかし、それにしても前記の二例が私にとって奇異にひびくことに変わりはありません。

以上、いずれも「お」を中心に、それも慣用に反するようなものについて見て来ましたが、それでは一体この様な例はどうしておこるのかと考えてみますのに、それは勿論丁寧、丁寧という氣持が働いているからだとは思いますが、一旦そういう言葉が多く使いつくと、今度はその逆効果で「お」のついた形の方が普通で、つかない言葉はゾンザイだという感じになり、つい慣習を破つてまで色々な言葉につけて行くようになるのだと思います。そして、このような心理は、「お」の場合だけに限ったことではなく、敬語を用いる場合には常に伴っているものと思われま

す。そこで次に、「お」以外の濫用の例を一二あげてみたいと思います。

アノー 理由トイタシマシテワ マワタクシノ性格トイタシマシテ
ダイタイ生産会社オ希望イタシマシタ。

これは「言語生活」(第三号)の録音器欄から拾いましたが、こんな短い文の中に「イタシマス」が三箇所も出て来ます。(右の文中、一字あけの箇所は音の休止を示しています。)解説には、入社試験の際の大学卒業予定学生の返答とありますが、自分の一生を左右するかも知れない場にいるのだという考えが強く学生を支配して、試験官に対する言葉が必要以上に丁寧なさせていることが考えられます。このような場合の敬語は、権威者に対する一種の自己防衛の手段と見る事ができましよう。私は、世の敬語にはこういう意味でのものも案外多いのではないかと思います。石坂氏も指摘された次のような例はこの種の敬語を誇張的に扱ったものと云えましよう。

左様々々どう奉りまして、お武士さま方へ向^{むか}う奉りまして、ひようろう仕ります様ナ心はけつして御ざりません。ハイ實に^{じつに}間違^{まちが}で御ざりますから、どうぞおはら立^{たち}を納メ奉りますやうに願奉ります。「滝亭鯉丈・花暦八笑人(文政三「一八二〇」年刊)日本名著全集・滑稽本集・七六五べ」

ハイ此者が申^{まを}、通り、どう、奉りまして、お武士様に、手むかひ、奉ります、ものか。わ、私^{わたし}は、し、舌^{した}が、ちぎんで物が、いはれ、ません。ハイ拜^{かみ}の、後生様で御座ります。どうぞ、命計りは御たすけ、遊ばさせられ、下さるびよう、エ、ぞんじ奉ります。(同前・七六六べ)

これは侍に粗相を働いた出目助という男が、平謝りに謝るところで、誤用の「奉る」を濫発するところにおかしさがあります。誤用かどうかは別として「奉る」その他の敬語を自己防衛の手段

にしているところは、前の「イタシマス」に似てその上を行くものと云えます。

しかし、また一方には、自己防衛などというのではなく、単なる馬鹿丁寧の為に「ございます」を連発する例や、上品めかすのが目的で「遊ばす」を濫用するような例もあり、これは戦後少しは減ったようにも見えますが、まだまだ一方には盛んに用いられて居り、江戸期でも同様だったことは三馬の作品などでも十分に知ることが出来ます。(窪田空穂先生 喜劇記念論集 日本文学論攷・「浮世風呂」・浮世床の敬語」を御参照下さい。)

なお、このような濫用の例は日本に限らず中国などでも見られることはカールグレン (Bernhard Karlgren) の引用したアーサー・スミス (Arthur Smith) の例話に、鼠に油壺をひっくり返されて晴着を台無しにした客が、憤然としながらも、主人が現れると、

私が「貴屋」(御部屋)に入り、「貴梁」(御梁)の下に腰を下しました時に、粗忽にも貴下の「貴鼠」(御鼠様)をお驚かせ申し、御鼠様が逃出される途端に貴下の「貴油壺」(御油壺)を私の「敝衣」(ぼろ着物)の上に引っくり返され、それがために私は貴下の「尊前」(御前)に於て斯様な鄙陋な恰好をして居るのでございます。(岩村忍・魚返善雄訳「支那言語学概論」による。)

と言ったとあるような例からでもわかりますが、中国の場合は極端な形式主義の現れとみられ、その点日本の例とはかなり趣を異にしていると思われます。

濫用については、なお多くの例がありますが省略に従い、次に重複の場合について見て行きたいと思ひます。

この類に属するものとしては、「御令聞様」、「おみおつけ」等しば指摘されるものがありますが、こういつた例の典型的なものとして、私は衆議院決算委員長の挨拶と女中の言葉からそれぞれ「御諸君」、「お御飯」という例を、また生徒の父兄の手紙から「貴先生」という言葉を拾ふことができました。

第一の例は「どうか御諸君の絶大なる御支援をお願い致しておきます。」第二の例は「お御飯です。どうぞ。」そして第三の例は「貴先生には益々御清栄云々」というものでしたが、三者ともおそらく誰が見聞きしても奇異に感ずるものではないかと思ひます。

しかし、一歩退いて考えてみますと、これらは前にあげた「御令聞様」や「おみおつけ」の例など何ら選ぶところがありません。しかも一方が奇異に感じられ、他方がそうでないというのは全く習慣によるだけのことと云えましょう。

更に、「おっしゃられる」、「お見えになられる」、「行きますです」、「ございますでございます」といった例から、例の「先生様」、そして「御父兄」に至るまで、この種のものにはきりがありません。

「おつゆ入れましようですか。」(女中の言葉)という云い方に驚いたのが私ばかりでない証拠には「言語生活」六号耳欄に「まゆげの下すりましようデスカ?」という床屋の言葉があがつて居ま

す。これなどは、「行きますです」同様様子手をしているような感じを与える言葉ですが、こういふ云い方の現れたのは、一方に「いいです」、「悪いです」、「思つたです」等の流行があつて、「です」体が現代語の基調となつてゐる為、それをつけないと何か丁寧さをかくという氣持がおこるからだと思われまふ。ただ、それなら何故「入れますでしようか」、「すりますでしようか」とならないかという、「でしよう」といふ云い方は一般に單なる推量に用いられて意志をあらわす為には使われなからだと考えられます。その他重複的な言ひ方は色々ありますが、肝腎なことは重複させることによつて敬意は倍加されるのではなく、むしろ、それによつて従前の敬語はその価値を失ふということなのですが、現実にはそういうことにお構いなく二重三重の重複形が作りあげられて行くやうです。

しかも、これらに類する例もまた江戸時代などでは、はつきりとその系統をたどることができません。次の諸例はそれらの事実を裏書して余りあるものと云えましょう。

- (1)助辞「ご」はそれ自身に「芳」とほど同程度の敬意を持つてゐるという性質上、「芳」の前に立たないものであるのに、現代の人は手紙や會話でそれを添へてゐる。例えば、「御芳志忝けない。」「御芳情過分の至り。」など。(ロドリゲス大文典・日本の言葉・第五号)
- (2)「これは先生さん。お早うございます。」(浮世床・初編巻之上)
- (3)「イエー。どういたしまして。やはりお宿様へさし置れまして。

イエス。最う。お宿さまのお道具を御拝借いたしました。おかげさまでお性しやうさまの御馳走か出来ますハイ。おまへさんでもハヤ。お盆の御客さまでさそとり込さまでござりませう。ハイ。お袋さまや。お内さまが。ハヤ。お大体さまでござりませぬ。(浮世風呂・四編巻之下)

(4)唐辛子を五つ六つ喰つても。こんな熱い涙は、出ませぬでござりまするで、ござりまする(心中宵庚申・日本名著全集・近松名作集下・五六二六)

第一の例からは今日の御芳名などの云い方が随分古いことがわかります。第二第三の例については著者三馬自身、前者には「先生といふてはなめげにきこゆると先生さんと様をつけていふ」と註し、後者は「詞ことばかひにはなはだていねいをつくし。すべての事におの字と様の字をつけてものいふくせあり」という割註を施している位ですから、こういう云い方を彼が行過ぎと見ていることは確かですが、同時にそんな云い方も実際に用ゐられたらうということは十分に考えられます。また、第四の例は中間の言葉(それも浜松の)で、すし、かなり作爲的なものですから、今日の「ございますでございます」と直結するわけには行きませんけれど、表現の性質としては似たものがあります。

このように現代敬語における重複形は、同様の例をすでに江戸期に見出すことができますが、こういう現象のおこる根底は、やはり一つの敬語の云い方では何か不足に感じられ(特にそれが使いふるされた場合は余計そうですが)屋上屋を架することになるのだと思います。そして、一旦重複の形をとった以上、これをも

とに戻すことはわざわざ粗末な云い方にするようでできにくく、ついそのままにおかれるようになり、それと同類の言葉の場合にも勢い重複形がとられるようになって段々この形がはびこってしまうのだと思います。そしてこの過程は裸の形の言葉に「御」をつけて云う場合と全く共通したものと云えます。

最後に第三類の誇張的表現の例としては、「豚児」「荆妻」「玉音」などがありますが、この方は中国の表現の直輸入とも云えるもので、極めて形式的なものです。これは漸次すたれて行く傾向にあると見られます。

そこで結論的に、これまでに煩雑な敬語過剰の原因は何所にあるかということをもう一度考えてみますと、誠に皮肉な言い方ながらそれは敬語を用いるというそのことにあるのだと云えるように思います。

何となら、敬語というものは再三申しますように使用をかさねるにつれて、段々敬意の薄れて行くものですから、当然それを補う為に一層丁寧な言い方をしたくなってくるのが人情だからです。そうならば自然もとの云い方は始めに対象とした人よりも下目の(と思う)人に用いたくもなりますし、重複濫用も敢えてしないわけには行かなくなってくるのだと思います。

だから日本人が敬語表現というものを持っている以上、それを簡素化するということは容易なことではないはずですが。ただし、人間を上下の関係で見る考え方が段々水平の方向に変えられて行くなら、敬語というものも自然整理されて行くだろうという

ことは、皇室に関する用語の戦後における変り方などを見ても云えると思います。

追記

この論文での引用を現代以外は江戸期に限ったのは、それ以前では「行過ぎ」と思われたかどうかということの判断が非常にむずかしくなり、そこに筆者自身の主観の多く入ることを怖れたのと、現代の行過ぎの現象は江戸時代から直接に糸を引いているところが非常に多いと考えたからです。しかし、上にも述べましたように、敬語を使う者の心理として、できる限り丁寧という気持のあることはいつの時代でも同様と考えられます。とすれば、敬語過剰の傾向もまたどの時代でも見られるに違いはないということは十分想像できましよう。

たとえば、「……する」という意味の敬語に「……し給ふ」と「……せさせ給ふ」とが同時に並行して用いられ、(平安時代)「……ある」と「御……ある」とが共存する(室町時代)といったような場合、それぞれ後者の方が前者に比して丁寧すぎると感じられる場合が多かつたろうというようなことは十分考えられますし、形容詞に「御」などつかなかったのにそれがつき始めた頃(鎌倉時代)にはやはり行過ぎと当時の人からは感じられたに違いないと思います。また、主体についての敬意表現の様式をその所屬物にまで及ぼすというようなことも、一方に古くから行われていても、それが余りに頻々と出てくれば(大鏡)やはり問題にされるのではないかと思えます。

このように考えて来ますと、各時代について過剰現象を追求

して行くことも可能と思いますが、今はその可能性があるということにとどめ、具体的には「古典における敬語過剰の現象」として稿を改めて考察してみたいと思います。

なお、この論文は昨年十一月二十日の国語学会公開講演会の講演題目、「敬語の誤りと行過ぎについて」の後半をなすものですが、当日は時間の関係もあり「行過ぎ」の部分を省略しましたので、改めて、つとめて規範的になることを避けながら筆をとったものです。ただし、行過ぎとしての例をあげること自体規範的と云えば勿論云えますが、他の人達によって指摘された例をもあげているということにおいて、客観的な面は持っているかと思えます。

なお「誤り」の方は、「国語学」第二十一輯掲載の「敬語の誤りについて」を御覧下さい。(一九五五年五月七日)

補記

ロドリゲスの大文典は土井氏の全訳が出版されましたが、論文執筆中に手に入らなかつた為、雑誌「日本の言葉」によって居ります。